



奥戸地区 震災復興の進め方について



地区災害対策拠点（奥戸地区センター）



防災活動拠点(奥戸二丁目公園)



防災船着場（北沼公園船着場）



避難場所（奥戸運動場）

1. はじめに

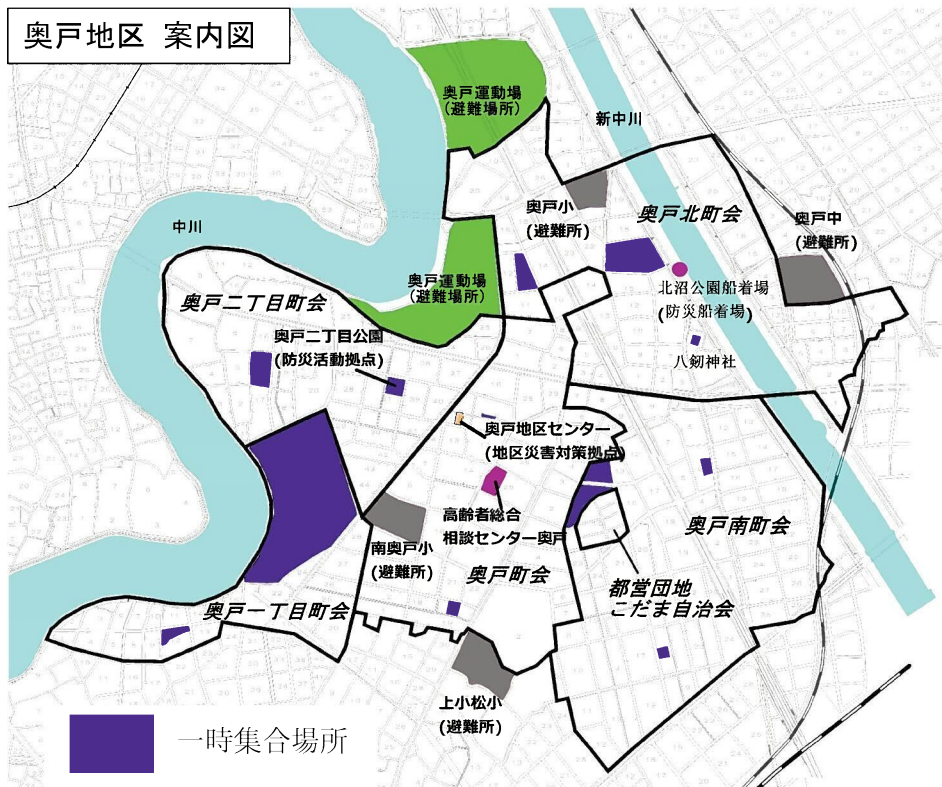
震災に見舞われた場合に、より安全で住みよいまちを再生し、いち早く区民の日常生活を取り戻していくことが重要となります。

本書は、平成 29 年度の奥戸地区震災復興まちづくり訓練において、震災に見舞われた場合にどのように復興していくか、地域のみなさんと葛飾区、大学が話し合い取りまとめた成果です。

とりまとめにあたっては、奥戸地区の多くの部分が液状化[※]の可能性が高い地域であることを踏まえ、液状化による全壊・半壊が約 550 棟、火災による焼失約 10 棟などの想定被害を設定して検討を進めました。

今後、大規模な震災などがあった場合には、本書を基本として、地域と葛飾区が協働して復興を進めていきます。

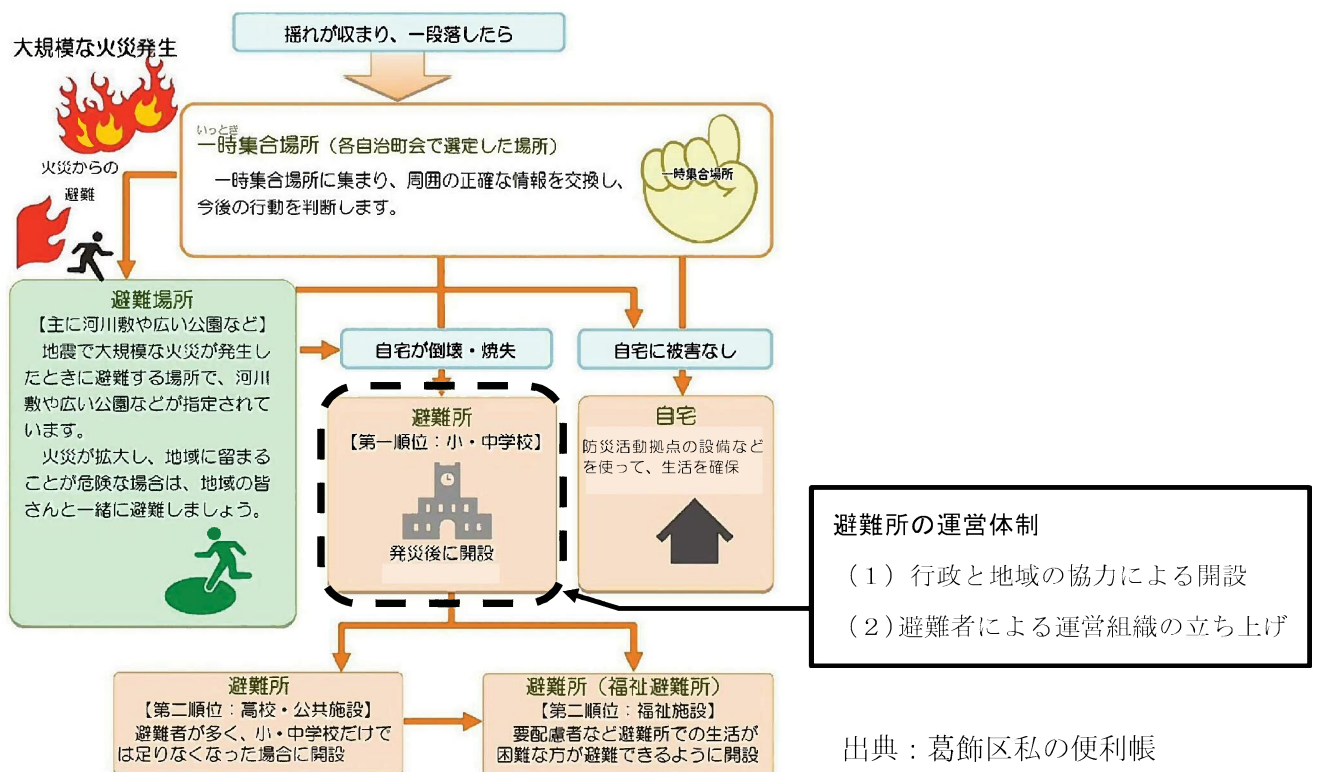
※液状化とは、地震の揺れによって地中の土・砂・水が分離され、地盤が水に浮いたような状態になることです。液状化により、安定していた地盤が急に柔らかくなることで、建物が沈下したり傾いたりするなど、生活に支障が生じます。



2. 発災から1、2週間後の流れ

奥戸地区が地震等で大規模な被害を受けた場合、以下の手順により、自治町会が葛飾区と協働して復興まちづくりに取り組みます。

【ステップ1】発災～避難～避難所開設まで

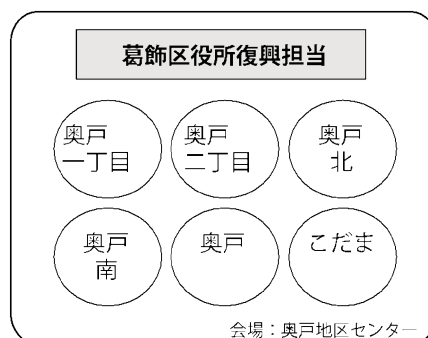


【ステップ2】被害状況の把握、生活回復本部の設置検討（発災から1週間を目安）

- ・各自治町会は、学校避難所と連携するとともに、被害や疎開、在宅避難者のニーズなどの情報を収集し、連合町会は、各町会が保有する情報を集約する。
- ・各自治町会は、避難所以外でも防災活動拠点や集会施設等を活用し、支援物資や復旧情報を提供する「生活回復本部」の設置を検討する。

【ステップ3】被災生活支援連絡会の立ち上げ（発災から2週間を目安）

- ・区復興担当と自治町会で、長期的なくらしとまちの再建に取り組むため、奥戸地区センターを拠点として「奥戸地区被災生活支援連絡会」を立ち上げる。



3. 復興期の被災生活支援連絡会の取組み

生活再建

- ・支援活動、施設の再開等の情報提供を行う。
- ・「高齢者総合相談センター奥戸」や大規模店舗などと連携する。
- ・地区外に避難した被災者向けの相談窓口の設置や情報提供を行う。

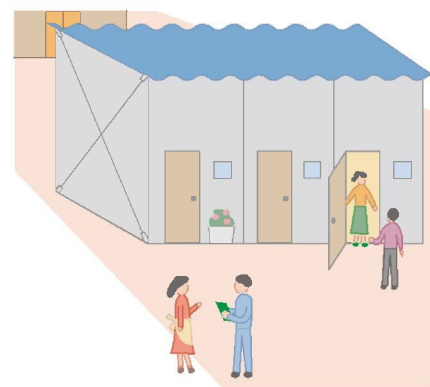
時限的市街地の形成と運営支援

- ・公園や農地などの用地の活用を検討する。
- ・住まいや街の復興を考える拠点や子ども、女性、高齢者の居場所として集会所を設置する。

液状化被害からの再建

- ・液状化被害が大規模な場合は、被災生活支援連絡会が窓口となり、地区内の被害状況について、区と情報交換を行い、被害状況を整理する。
- ・被災地区ごとの再液状化対策の意向を集約し、奥戸地区として復興まちづくりの提案を行うかどうかの検討を行う。

時限的市街地のイメージ



復興まちづくり検討のイメージ



4. 来たるべき震災に備えた地域づくり

(1) 避難所運営会議と避難所開設・運営訓練の実施

避難所開設の運営を円滑に進めるため、区の支援を受けながら、自治町会と学校が連携して学校避難所の運営会議や訓練を実施します。

(2) 事業所等とのネットワークづくり

奥戸地区連合町会は、事業所、店舗、警察、消防署、消防団、PTA、福祉施設等との災害時協力体制を構築します。



(3) 自治町会の役割の整理（発災～復興）

発災直後の復旧から復興に至るまで、自治町会が担う役割を整理します。

5. 「奥戸地区のまちの魅力」

訓練で出された「奥戸地区のまちの魅力」をご紹介します。

下記の特性や資源を大切にして、震災時の復興まちづくりを進めます。

① 住みよい・暮らしよい安全・安心なまち

- ・ 静かな住宅地であまり発展しすぎてないのが良い。
- ・ 神社やお寺の伝統行事を大事にするなど、人情味がある。

② 水と緑が豊かなまち

- ・ 中川、新中川に囲まれている。
- ・ 生産緑地が多い。



中川テラス



八剱神社

「奥戸地区 震災復興の進め方について」

〈平成30年3月発行〉

○奥戸地区連合町会 ○葛飾区（都市整備部調整課） ○首都大学東京